

警女描いた倉敷市出身の洋画家

斎藤真一没後20年で光

目が不自由な北国の女性旅芸人「警女」を題材にした作品群で知られる倉敷市出身の洋画家斎藤真一(1922~94年) = 写真 = の没後20年に合わせ、同市立美術館(同市中央)



が顕彰に力を注いでいる。「警女シリーズ」を中心とした収蔵品展示や親族らによる対談を展開。哀愁漂う独自の世界を表現した郷土作家に光を当てている。(鳥越謙一)

市立美術館

斎藤は同市児島味野の生まれ。東京美術学校(現東京芸術大)を卒業し、味野中、天城高などで教壇に立った後、渡仏した。警女に興味を抱いたのは、パリで交流のあった洋画家藤田嗣治のアドパイスがきっかけ。60年代半ば、三味線を手で警女唄を伝え歩く警女と旅をとともにし、その姿や心情を作品に投影した。同美術館は斎藤について「ハンディを乗り越えて生きる女性たちの強さと弱さを独特のデフォルメで表現した作家」と位置付ける。今回、北陸地方の警女の芸と精神を受け継ぐ萱森直子

作品展や対談を企画

さんらの公演がある倉敷音楽祭開催に合わせて展示。音楽祭最終日の23日まで、

収蔵品18点と市内の公共施設から借り受けた1点を館内で紹介している。

警女シリーズは、イラスト風の平面的な構図が特徴。寒々しい星空の下でた



警女シリーズを中心とした収蔵品が並ぶ展示会場

たずむ姿が印象的な「星になった警女(みさお警女の悲しみ)」は、もの悲しい表情や繊細で消え入りそうな指先から孤独感がにじむ。肩を寄せ合う警女たちの絆がうかがえる「胡桃」、24人それぞれの表情を描き分けた「草間警女一覧」など代表作が並ぶ。22日午前10時半からは、対談によって作家と作品の魅力を探る。同美術館講堂で、長男の裕重さんと、斎藤をよく知る富山市立富山ガラス造形研究所の野田雄一教授が語り合うほか、女優の金沢碧さんが斎藤の随筆などを朗読する。先着200人。

22、23の両日は、同音楽祭の一環で倉敷市中央の市芸文館で各日4回ずつ「越後警女唄」のステージが上演される。同美術館は「ステージと一緒に作品を鑑賞することで、斎藤が見つめた警女の世界観とともに作品の魅力を深く理解できるのでは」と話している。